

		助成番号	2020－1				
特別重点研究助成 最終報告書 2023 年 6 月 27 日							
学 長 殿		<table border="1"> <tr> <td>研 究</td> <td>所属・職 文学部・教授</td> </tr> <tr> <td>代表者</td> <td>氏 名 山 田 邦 明</td> </tr> </table>		研 究	所属・職 文学部・教授	代表者	氏 名 山 田 邦 明
研 究	所属・職 文学部・教授						
代表者	氏 名 山 田 邦 明						
研 究 課 題 名	愛知大学等における歴史的建造物の調査・研究						
研 究 概 要	愛知大学の構内には、明治末年から昭和初年にかけて建築された建物がいくつか現存している。明治 41 年(1908)建築の陸軍第十五師団司令部、歩兵第六十聯隊将校集会所、機銃廠、昭和 2 年(1927)建築の大講堂、養生舎である。建築から 100 年前後経過した貴重な歴史的建造物であり、その保存と効果的な利用を図るためにも、詳細な調査が必要である。また、愛知大学の構内には多くの歴史的遺構が存在し、大学構内とその周辺に広がる陸軍関係の建造物や遺構の確認調査を行うことによって、地域社会における軍隊や大学の位置づけや、建造物の利用の歴史について研究することが可能になる。 この特別重点研究では、まず愛知大学にある歴史的建造物の所在を確認して、その歴史的経緯について考察を加え、現在も遺されている 5 つの建物の本格的調査を実施する。また、大学の周辺に広がる陸軍第十五師団の敷地に現存する建造物や遺構の確認を行う。さらに第十五師団と同じ時期に創設された師団にかかわる建造物の見学と資料収集を行い、師団における建造物の位置関係などについて検討を加える。 このような作業の蓄積によって、愛知大学における建造物の利用の経緯を解明するとともに、日本の近現代における軍隊や大学、建造物の継承と利用という学問的な研究の進展にも寄与できると考える。						
研究の中心となる 研究所	総合郷土研究所						
研 究 期 間	2020 年 4 月 1 日 ～ 2023 年 3 月 31 日 （3 年間）						
研究の目的 愛知大学の敷地には、かつて陸軍第十五師団の司令部と歩兵第六十聯隊が置かれていた。第十五師団の建物は明治 41 年(1908)に建築され、明治 45 年には師団長官舎（現在の愛知大学公館）が建てられた。大正 14 年(1925)に第十五師団が廃止されたあと、師団司令部と歩兵第六十聯隊の跡地に豊橋陸軍教導学校が置かれ、昭和 2 年(1927)に建物が建築された。その後、豊橋陸軍予備士官学校の敷地として利用され、戦後の昭和 21 年(1946)に愛知大学のキャンパスとなったのである。 陸軍の建物はそのまま愛知大学の施設として利用された。開学から 70 年あまりを経る中で、古い建物の多くは失われたが、現在に遺されているものもいくつかある。明治 41 年建築の陸軍第十五師団司令部（愛知大学旧本館、現在の大学記念館）、歩兵第六十聯隊将校集会所（かつての総合郷土研究所、中部地方産業研究所）、機銃廠（現在の中部地方産業研究所附属生活産業資料館）、明治 45 年建築の師団長官舎（現在の愛知大学公館）、昭和 2 年建築の大講堂（現在の第二体育館）、養生舎（現在の教職員組合事務所）である。 このうち陸軍第十五師団司令部（愛知大学旧本館）は平成 10 年(1998)に国の登録文化財に指定され、師団長官舎（愛知大学公館）は平成 14 年(2002)に豊橋市の指定有形文化財となり、平成 27 年(2015)には綿密な建築調査の成果をまとめた報告書が作成された。 しかし歩兵第六十聯隊将校集会所、大講堂、養生舎、機銃廠については、本格的な調査がなされておらず、建物の老朽化も進んでいる。文化財指定された師団司令部についても、本格的な調査報告書は作成されていない。こうした建物のほかにも、陸軍の時代に造られた門や壁などの建造物（遺構）が各所にあり、全体的な再認識が必要となっている。 このような現状を打開し、歴史的建造物の保存と有効利用を図るために、まずは愛知大学にある歴史的建造							

様式 4（特別重点研究助成）

物の所在を確認して、歴史的経緯について考察を加え、そのうえで現在も遺されている5つの建物（師団司令部、将校集会所、大講堂、養生舎、機銃廠）についての本格的な調査を実施する。あわせて建物の耐震診断も行っ
て現状を把握し、将来の指針を考える足がかりとしたい。

陸軍第十五師団の敷地は愛知大学の西南部一帯に大きく広がり、吉田城跡（現在の豊橋公園）にも存在した。このような大学の外に所在する陸軍関係の建造物や遺構についての確認・調査を行って、陸軍の敷地全体のあり
ようを把握する。さらに、第十五師団と同時期に設置された他の師団（かつての建造物が現存する第十六師
団、第十七師団、第十八師団）の跡地赶赴いて、建造物の見学と資料収集を行う。そのなかで師団に関する GIS
データベースを構築し、それぞれの師団における建造物の位置関係についても立地分析を加える。

軍隊が置かれたところには堅固で質の高い建造物が多く作られ、軍隊が退去したあとは、役所や学校など公
共の場所として転用され、建物の多くはそのまま利用された。愛知大学はこうした事例の典型であり、古い時
代の建造物が遺っていることの意味は大きい。歴史学、地理学及び建築学の協同によって調査・研究がなされ
れば、有意義な学際的研究となり、日本の近現代における軍隊や大学の位置づけや建造物利用の歴史にかかわ
る研究の進展にも寄与できる。

研究を着実に進めるために、歴史学、地理学及び建築学の専門家を招いて講演会・研究会等を開催し、建物
の調査結果をまとめた報告書と、歴史学、地理学及び建築学の研究成果を総合的に示した書籍を刊行する。

また、こうした歴史的建造物を今後どのように活用していくべきかを考えるために、現在の建物の状況（耐
震状況など）を認識したうえでの提言を受け、さらに研究成果に関わる展示・見学会や、地域住民を対象とし
た意識調査なども行い、社会に還元するとともに、地域における大学の歴史的建造物の意義を探る。

研究計画の概要および方法

特別重点研究における課題と研究方法（当初設定した課題と研究方法）は以下の通りである。

- ① 愛知大学に所在する歴史的建造物の所在確認
…建物だけでなく、土塁・門柱・塀、神社跡や古墳など、学内にある遺構について全体的に確認する。
- ② 愛知大学の歴史的建造物にかかわる資料収集、歴史的経緯の研究
…大学の歴史的建造物や遺構にかかわる文献資料を収集し、それぞれの歴史的経緯（どのように利用がな
されたかなど）について研究を進める。
- ③ 愛知大学に所在する歴史的建造物の調査・耐震診断
…以下の建物を対象とする本格的な調査を実施する。実測調査、老朽化診断、材料や構法の確認などを行
い、図面を作成する。あわせて、おのこの建物を対象とする耐震診断を行い、今後の保存方法につい
ての提言を得る。
 - ・ 陸軍第十五師団司令部（愛知大学旧本館、現在の大学記念館）
 - ・ 歩兵第六十聯隊将校集会所（かつての総合郷土研究所、中部地方産業研究所）
 - ・ 機銃廠（現在の中部地方産業研究所附属生活産業資料館）
 - ・ 陸軍教導学校大講堂（現在の第二体育館）
 - ・ 陸軍養生舎（現在の教職員組合事務所）
- ④ 陸軍第十五師団にかかわる歴史的建造物の確認・調査
…かつて第十五師団が存在した場所にどのような建造物・遺構があるか、関係の方々の協力を得ながら確
認・調査を行う。
 - ・ 歩兵第十八聯隊（吉田城跡）
 - ・ 野砲兵第二十一聯隊（現在の愛知県立時習館高等学校）
 - ・ 輜重兵第十五大隊（現在の愛知県立豊橋工科高等学校など）
 - ・ 騎兵第十九聯隊（現在の豊橋市立福岡小学校など）
 - ・ 騎兵第二十五聯隊（現在の豊橋市立中野小学校など）
 - ・ 騎兵第二十六聯隊（現在の豊橋南郵便局など）
 - ・ 兵器支廠（現在の豊橋市立南部中学校・豊橋市立栄小学校）
 - ・ 衛戍病院（現在の豊橋市保健所など）
- ⑤ 陸軍師団にかかわる歴史的建造物の見学・資料収集
…第十五師団と同時期に創設された師団のうち、建造物がよく遺されている場所を選んで、現地見学と資
料収集を行う。
 - ・ 第十六師団（京都府京都市）
 - ・ 第十七師団（岡山県岡山市）
 - ・ 第十八師団（福岡県久留米市）
- ⑥ 陸軍師団にかかわる歴史 GIS データベース構築、建造物の立地分析
- ⑦ 愛知大学の建造物に対する地域住民の意識調査
- ⑧ 講演会・研究会等の開催
…調査・研究の過程で、課題の検討や成果の公開を目的として、講演会・研究会等を開催する。

様式 4（特別重点研究助成）

⑨ 研究成果にかかわる展示・見学会等の開催 ⑩ 成果物の刊行 …建物の調査結果をまとめた報告書と、軍隊と大学にかかわる歴史研究と建築調査の成果の両者を総合した書籍をまとめて刊行する。 ⑪ ホームページを利用した成果の公開
特別重点研究助成申請時、審査委員会より付された条件、指摘事項等への対応方法 ※該当の場合のみ記載 (ア) 学内外・他分野の研究者により構成された研究実施体制に対し、学際的な研究活動を着実に進めることを期待している。そのため、近現代史・建築史を専門とする研究者を含めた定期的な研究会の開催などを入れ込んだ研究計画が必要になる。 ⇒近現代史・建築史・地理学を専門とする研究者と協力関係を築き、定期的な研究会の開催を目指す。 (イ) 建物耐震性診断の費用は研究費として計上されている。そのため、耐震性診断結果を建築史、文化財保存と景観学などの観点から、学術的にまとめる必要がある。 ⇒耐震性診断結果については報告書に記載し、これをもとに学術的な検討を進める。 (ウ) 建学の精神を踏まえ、今回の特別重点研究の成果を地域社会に還元することを期待している。 ⇒豊橋市教育委員会や美術博物館、学校関係者と連携しながら、学びの場や素材を提供したい。

研究代表者	所属	職名	氏 名	役割分担
	文学部	教授	山田邦明	全体統括
研究分担者	所属	職名	氏 名	役割分担
	文学部	教授	神谷 智	②愛知大学の歴史的建造物にかかわる資料収集、歴史的経緯の研究、④陸軍第十五師団にかかわる歴史的建造物の確認・調査
	所属	職名	氏 名	役割分担
	文学部	教授	廣瀬憲雄	④陸軍第十五師団にかかわる歴史的建造物の確認・調査
	所属	職名	氏 名	役割分担
	文学部	教授	岡本耕平 (2021 年度より)	⑤陸軍師団にかかわる歴史的建造物の見学・資料収集、⑥陸軍師団にかかわる歴史 GIS データベース構築、建造物の立地分析
	所属	職名	氏 名	役割分担
	文学部	准教授	近藤暁夫	⑤陸軍師団にかかわる歴史的建造物の見学・資料収集、⑥陸軍師団にかかわる歴史 GIS データベース構築、建造物の立地分析
	所属	職名	氏 名	役割分担
	地域政策学部	教授	阿部 聖	②愛知大学の歴史的建造物にかかわる資料収集、歴史的経緯の研究、④陸軍第十五師団にかかわる歴史的建造物の確認・調査
	所属	職名	氏 名	役割分担
	地域政策学部	准教授	飯塚公藤 (2020 年度のみ)	⑤陸軍師団にかかわる歴史的建造物の見学・資料収集、⑥陸軍師団にかかわる歴史 GIS データベース構築、建造物の立地分析
	所属	職名	氏 名	役割分担
	所属	職名	氏 名	役割分担
研究協力者	藤田佳久（愛知大学名誉教授、総合郷土研究所非常勤所員、東亜同文書院大学記念センター学外研究員）			
	樋口義治（愛知大学名誉教授、総合郷土研究所非常勤所員、中部地方産業研究所客員所員）			
研究協力者	飯塚公藤（元愛知大学准教授、総合郷土研究所非常勤所員、中部地方産業研究所研究員）（2021 年度より）			

様式 4 (特別重点研究助成)

区 分	合 計	消耗品費 ・用品費	旅費交通費	印刷製本費	業務委託費・ 支払報酬手数料	図書購入費	そ の 他 (郵便料等)
使用計画に記載の 研究費の使用内訳	9, 221, 000	380, 000	690, 000	3, 562, 000	3, 096, 000	700, 000	793, 000
実支出額の 使用内訳	4, 841, 692	186, 992	238, 680	1, 802, 900	1, 992, 509	499, 486	121, 125
購 入 物 品 明 細 書							
図 書・設 備 備 品・用 品		仕 様 (会社名・型 ・性能等)	数量	単 価(円)	金 額(円)	設 置 場 所 (研究室名)	備 考
デジタル１眼レフカメラ		キャノン EOS	1	94, 000	94, 000	総合郷土研究所	2020 年度購入
図書(陸軍成規類聚資料集成１)			8	22, 270	178, 160	総合郷土研究所	2020 年度購入
図書(陸軍成規類聚資料集成２～４)			5	一式	104, 940	総合郷土研究所	2020 年度購入
国土地理院撮影空中写真		DVD	4	１セット	18, 156	総合郷土研究所	2021 年度購入
近代史史料陸軍省日誌			10	10, 133	101, 330	総合郷土研究所	2021 年度購入
師団、軍等関係書籍類		図書等			95, 200	総合郷土研究所	2022 年度購入

様式 4（特別重点研究助成）

研究実施状況（概要）及び研究成果について

特別重点研究の開始段階で設定した研究課題のそれぞれについて、3 年の研究期間における研究実施状況及び研究成果をまとめると以下ようになる。ただ、2020 年度の研究期間開始段階から新型コロナウイルス感染拡大という事態が起り、この状況がしばらく続いたため、講演会・研究会の開催、現地調査などの事業が予定通り実施できなくなったことを、あらかじめお断りしておきたい。

① 愛知大学に所在する歴史的建造物の所在確認

- ・新たに所在が確認された建物・工作物の図面と地図（「建物工作物一覧図」）（②参照）を参考にしながら、豊橋校舎内の建物や遺構の調査を行った。正門と副門（かつての西門）については図面を参照しながら昭和 36 年当時と現在の状況を比較し、「土手」の調査により、そのかなりの部分が残されていることを確認した。
- ・豊橋校舎の「哲学の森」に移築された古墳石室に関わる研究を進め、ここにある盛土は古墳ではなく、陸軍の時代から存在した築山であるとの推測に至った。この研究成果（廣瀬憲雄「愛知大学豊橋校舎に移築された古墳石室」）は『愛知大学特別重点研究 愛知大学等における歴史的建造物の調査・研究 年次報告書—2021 年度—』に収録した。

② 愛知大学の歴史的建造物にかかわる資料収集、歴史的経緯の研究

- ・豊橋校舎の総務課に「旧豊橋第一陸軍予備士官学校（歩兵隊）払下申請図面」と題された建物・工作物の図面（158 枚）が保管されていることがわかった。また、この図面に関連して、大学構内における建物・工作物の配置を記載した地図（「建物工作物一覧図」、昭和 36 年 12 月当時の状況を示す）の所在も確認された。大学が豊橋校地の払い下げ申請を行ったのは昭和 37 年なので、これに先立って図面が作成されたものと推測される。「旧豊橋第一陸軍予備士官学校（歩兵隊）払下申請図面」については、新たに目録を作成し、「建物工作物一覧図」とあわせて『愛知大学特別重点研究 愛知大学等における歴史的建造物の調査・研究 年次報告書—2020 年度—』に収録した。
- ・豊橋市図書館・豊橋市美術博物館・豊橋市文化財センター・二川宿本陣資料館に赴いて、陸軍に関わる写真の所在を確認し、資料の収集も行った。
- ・陸軍第十五師団に関わる記事がある書籍を捜し、研究現状を確認する作業を行った。総合郷土研究所に所蔵されている書籍の中から、師団関係の記事を収めているものを捜し出す作業を進め、多くの書籍の存在を確認した。ことに近隣の地域の方々が主体となってまとめられた『福岡 むかしと今』（豊橋市立福岡小学校校区誌編集委員会編、1985 年）、『南栄町物語—軍隊の街から学園の街へ』（水口源彦、1996 年）、『校区のあゆみ 栄』（栄校区総代会・栄校区史編纂委員会編、豊橋市総代会発行、2006 年）などは、師団と地域の関わりなどについて具体的に伝えてくれる貴重な財産である。
- ・陸軍第十五師団に関わる文献史料を多数発見した。主要なものは以下の通りである。
 - (1) 防衛省防衛研究所戦史研究センター所蔵史料…陸軍省の「大日記」など
 - (2) 豊橋市役所所蔵史料…「高師村村会議事録」「高師村村会決議書」
 - (3) 『新朝報』『新愛知』『三遠日報』『豊橋日日新聞』等の新聞記事
…豊橋市中央図書館の新聞データベースより
 - (4) 「陸軍第十五師団兵営等敷地工事設計書」8 冊…豊橋市中央図書館に復写が所在
 - (5) 「星野茂吉日記」（騎兵第十九聯隊に所属した星野茂吉の日記）4 冊
…ご遺族からご寄贈いただき、愛知大学総合郷土研究所で所蔵

このうち (1) (2) (3) については、明治 40 年（1907 年）から明治 44 年までの関連史料を翻刻し、『愛知大学特別重点研究 愛知大学等における歴史的建造物の調査・研究 年次報告書—2021 年度—』『愛知大学特別重点研究 愛知大学等における歴史的建造物の調査・研究 年次報告書—2022 年度—』に収録した。(4) (5) については本文の翻刻を行い、『愛知大学特別重点研究 愛知大学等における歴史的建造物の調査・研究 最終報告書—2020～2022 年度—』に収録した（「星野茂吉日記」は 4 冊からなるが、このうち 1～3 の 3 冊分を翻刻した）。

③ 愛知大学に所在する歴史的建造物の調査・耐震診断

- ・調査の対象とした建物は以下の 5 つである。
 - 陸軍第十五師団司令部（愛知大学旧本館、現在の大学記念館）
 - 歩兵第六十聯隊将校集会所（かつての総合郷土研究所、中部地方産業研究所）
 - 機銃廠（現在の中中部地方産業研究所附属生活産業資料館）
 - 陸軍教導学校大講堂（現在の第二体育館）
 - 陸軍養生舎（現在の教職員組合事務所）
- ・泉田英雄氏（元豊橋技術科学大学准教授）が中心となって建物調査を行い、その成果を「愛知大学豊橋校舎敷地内旧陸軍施設実測調査報告書」（調査結果と建物の図面を収める）としてまとめ、『愛知大学特別重点研究 愛知大学等における歴史的建造物の調査・研究 年次報告書—2020 年度—』に収録した。
- ・魚津社寺工務店の藤井智規氏による耐震診断を実施し、その成果を「愛知大学豊橋校舎内物件耐震診断業

様式 4（特別重点研究助成）

務構造検討書」にまとめ、建物の耐震診断の結果と、補強の方法についての所見を示し、その一部（「はじめに」「耐震診断」「耐震診断結果と補強計画案」の部分）を『愛知大学特別重点研究 愛知大学等における歴史的建造物の調査・研究 年次報告書—2020 年度—』に収録した。なお、陸軍教導学校大講堂（現在の第二体育館）は鉄骨造で、柱脚や、壁などによって見え隠れとなった接合部の仕様が不明であるため、現時点では正確な耐震診断ができないことが判明した。

④ 陸軍第十五師団にかかわる歴史的建造物の確認・調査

- ・愛知大学豊橋校舎やその周辺にある門柱・哨舎などの建造物、排水路・排水溝などの確認作業を行った。
- ・かつて陸軍第十五師団が存在した場所である愛知大学近隣の時習館高等学校、豊橋工科高等学校、南部中学校、福岡小学校及び中野小学校を訪問、建造物の調査・確認などを行い、時習館高等学校に昭和 18 年に豊橋愛馬会が作製した馬の像（レリーフ）、豊橋工科高等学校に陸軍時代のものと思われる鉄製の遺物が存在することなど、新たな知見を得た。
- ・研究成果発表会（⑧参照）の翌日、陸軍第十五師団跡地を歩き、南部中学校・豊橋工科高等学校・王ヶ崎公園にある門柱・哨舎や、師団設置時に開鑿・整備された排水路（山田川・内張川と師団都市下水路）を中心に巡見する機会を持った（参加者は 14 名）。

⑤ 陸軍師団にかかわる歴史的建造物の見学・資料収集

- ・陸軍第十五師団と同時期に設置された陸軍第十七師団の跡地である、現在の岡山大学とその周辺に赴き、旧陸軍関係の建造物（建物や門柱など）や遺構（土塁など）の存在を確認し、岡山大学における研究成果にかかわる情報を得た（『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2005』（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、2007 年）第 1 章第 3 節「1. 津島地区とその周辺の陸軍関連施設について」（野崎貴博氏執筆）など）。さらに岡山県立図書館に赴いて関連資料を捜し、復写を行った。
- ・同じく陸軍第十五師団と同時期に設置された陸軍第十八師団の跡地（福岡県久留米市）に赴き、師団司令部跡地とその周辺、騎兵・輜重兵・野砲兵・山砲兵・歩兵（現陸上自衛隊）各聯隊跡地、師団長官舎（高牟礼会館）を巡見、排水溝の確認などを行い、さらに久留米市中央図書館に赴いて関係資料を収集した。

⑥ 陸軍師団にかかわる歴史 GIS データベース構築、建造物の立地分析

- ・陸軍第十五師団跡地を巡見し、地形の観察、排水路の確認などを行った。
- ・「とよはしアーカイブ」で閲覧可能な資料やその利用可能性について紹介、GIS データベース構築の作業を進めた。その成果（飯塚公藤「陸軍第 15 師団に関する歴史 GIS データベースの構築に向けて—豊橋市図書館所蔵資料を中心に—」）は『愛知大学特別重点研究 愛知大学等における歴史的建造物の調査・研究 年次報告書—2022 年度—』に収録した。

⑦ 愛知大学の建造物に対する地域住民の意識調査

- ・愛知大学豊橋校舎に残る陸軍関係の歴史的建造物について、学生や地域住民がどのような考えを持っているか知るために、愛知大学の現役の学生、総合郷土研究所の講演会やシンポジウムに参加したことのある人々、大学敷地に隣接する町内に住んでいる市民を対象とするアンケートを実施、1,100 枚ほどを配布し、3 割を超える回答を得た。アンケートの結果とその分析についてまとめた論考（樋口義治「愛知大学に残る旧陸軍第 15 師団関係歴史的建造物に対する学生・市民アンケート意識調査」）を『愛知大学特別重点研究 愛知大学等における歴史的建造物の調査・研究 年次報告書—2022 年度—』に収録した。

⑧ 講演会・研究会等の開催

- ・課題の検討や成果の公開を目的として、研究成果発表会「愛知大学豊橋校舎の歴史的建造物—100 年の歲月（とき）を超えて—」を下記の通り開催した。

日時：2022 年 10 月 1 日（土） 13:30～16:00

会場：愛知大学豊橋校舎 6 号館 620 教室

講師・演題

山田邦明氏（愛知大学文学部教授、総合郷土研究所所員）「陸軍第 15 師団の設営」

泉田英雄氏（福島大学非常勤講師、建築史家）「愛知大学豊橋キャンパスに残る旧陸軍建物と図像資料—払い下げ時の建物実測図集の意味—」

⑨ 研究成果にかかわる展示・見学会等の開催

- ・研究成果発表会（⑧参照）の際、会場のそばの小教室において、泉田氏の講演でも言及された「旧豊橋第一予備士官学校（歩兵隊）払下申請図面」の一部（復写したもの）を展示した。また、講演終了後、泉田氏の案内のもと、大学構内を巡見して陸軍関係の建造物を見学する機会を持ち、多数の参加者を得た。
- ・調査や研究の成果を広く公開するため、大学記念館内研究所展示室において資料（「旧豊橋第一予備士官学校（歩兵隊）払下申請図面」の復写）の展示会「愛知大学豊橋校舎の建物図面」を開催した（2023 年 3 月 28 日～7 月 31 日）。

⑩ 成果物の刊行

- ・2020 年度には『愛知大学特別重点研究 愛知大学等における歴史的建造物の調査・研究 年次報告書—2020 年度—』を編集・刊行した。ここには「愛知大学豊橋校舎敷地内旧陸軍施設実測調査報告書」と「愛知大学豊橋校舎内物件耐震診断業務構造検討書」の一部を収録し（③参照）、あわせて「旧豊橋第一陸軍予

様式 4（特別重点研究助成）

備士官学校（歩兵隊）払下申請図面」の目録と「建物工作一覧図」も収めた（②参照）。

- ・2021 年度には『愛知大学特別重点研究 愛知大学等における歴史的建造物の調査・研究 年次報告書—2021 年度—』を編集・刊行した。ここには、陸軍第十五師団設置の経緯を概観した「陸軍第十五師団の設置—建設工事と環境整備—」（山田邦明）、「哲学の森」への古墳石室移築について追究する中で、背後の築山が旧軍時代に造成されたものであることを解明した「愛知大学豊橋校舎に移築された古墳石室」（廣瀬憲雄）（①参照）を収載し、あわせて陸軍第十五師団に関係する明治 40 年から 44 年までの文献史料を、建造物や環境整備に関わるものを中心に収録した（②参照）。

- ・2022 年度には『愛知大学特別重点研究 愛知大学等における歴史的建造物の調査・研究 年次報告書—2022 年度—』、『愛知大学特別重点研究 愛知大学等における歴史的建造物の調査・研究 最終報告書—2020～2022 年度—』、『豊橋と陸軍師団—歴史と建物—』（山田邦明・泉田英雄）の 3 冊を編集・刊行した。『年次報告書』には、地図の紹介と現地調査によって歴史 GIS データベース構築の方向性を示した「陸軍第 15 師団に関する歴史 GIS データベースの構築に向けて—豊橋市図書館所蔵資料を中心に—」（飯塚公藤）（⑥参照）、学生・市民アンケートの結果を紹介し分析を加えた「愛知大学に残る旧陸軍第 15 師団関係歴史的建造物に対する学生・市民アンケート意識調査」（樋口義治）（⑦参照）を収載し、あわせて陸軍第十五師団関係史料（前冊に収めた史料の補遺で、兵員の召集、兵営における生活、高師原・天白原・老津原における訓練など、さまざまなことがらに関わる新聞記事）を収録した（②参照）。

『最終報告書』には特別重点研究の概要と成果についてまとめた「特別重点研究「愛知大学等における歴史的建造物の調査・研究」とその成果」（山田邦明）を収載し、あわせて「陸軍第十五師団兵営等敷地工事設計書」（8 冊）と「星野茂吉日記」（全 4 冊のうち 1～3 の 3 冊）の本文を翻刻して掲載した（②参照）。

『豊橋と陸軍師団—歴史と建物—』は一般の書籍で、研究成果発表会（⑧参照）の内容をまとめて掲載し、さらに師団設置から大正 7 年（1918）頃までの陸軍第十五師団と当時の豊橋のようすを概観した「豊橋に師団があった頃」（山田邦明）、惜しくも解体された偕行社の建物調査報告である「偕行社の建造物文化財調査」（泉田英雄）を収載した。

⑪ ホームページを利用した成果の公開

- ・講演会や展示について、総合郷土研究所のホームページに随時掲載した。
- ・刊行した 4 冊の報告書（年次報告書 3 冊と最終報告書）について、リポジトリでの公開のための作業を行った。

様式 4（特別重点研究助成）

研究成果の公表について ・課題の検討や成果の公開を目的として、研究成果発表会「愛知大学豊橋校舎の歴史的建造物—100 年の歳月（とき）を超えて—」を開催した（「研究実施状況（概要）及び研究成果について」⑥参照）。 ・調査や研究の成果を広く公開するため、大学記念館内研究所展示室において資料（「旧豊橋第一予備士官学（歩兵隊）払下申請図面」の復写）の展示会「愛知大学豊橋校舎の建物図面」を開催した（「研究実施状況（概要）及び研究成果について」⑨参照）。 ・成果物として報告書・書籍を下記の通り刊行した（「研究実施状況（概要）及び研究成果について」⑩参照）。 『愛知大学特別重点研究 愛知大学等における歴史的建造物の調査・研究 年次報告書—2020 年度—』 『愛知大学特別重点研究 愛知大学等における歴史的建造物の調査・研究 年次報告書—2021 年度—』 『愛知大学特別重点研究 愛知大学等における歴史的建造物の調査・研究 年次報告書—2022 年度—』 『愛知大学特別重点研究 愛知大学等における歴史的建造物の調査・研究 最終報告書—2020～2022 年度—』 『豊橋と陸軍師団—歴史と建物—』（山田邦明・泉田英雄） ・上記のような成果公開については、総合郷土研究所のホームページに随時掲載、広報した。また、刊行した 4 冊の報告書（年次報告書 3 冊と最終報告書）について、リポジトリでの公開のための作業を行った（「研究実施状況（概要）及び研究成果について」⑪参照）。
研究成果の評価について 学外からのどのような機会・方法により評価を受けたか、その実態と評価者（評価者の所属・氏名を明記してください）からの評価コメントについてご記入ください。なお、学内からの評価を受けている場合は、必要に応じてご記入願います。 研究成果の外部評価については、西澤泰彦氏（名古屋大学大学院環境学研究科教授）、吉田律人氏（横浜都市発展記念館主任調査研究員）、岩瀬彰利氏（豊橋市図書館副館長）の 3 氏に、成果物である報告書 4 冊と書籍『豊橋と陸軍師団』をお読みいただき、コメントを頂戴するという形をとった。西澤氏には建築史、吉田氏には日本近現代軍事社会史、岩瀬氏には郷土史研究の、それぞれの視座から、以下のようなコメントをいただいた。 【西澤泰彦氏】 2020 年度から 3 年度にわたっておこなわれた「特別重点研究」について、特に建築史的視点に基づき、研究方法、研究成果の内容と学術的意義を中心に所見を記す。 〈研究方法〉 歴史的建造物に関する研究は、基本的に文献調査、遺構調査、聞き取り調査の 3 つの方法を組み合わせ、それによって建物の現状に基づいた特徴把握はもとより、建設経緯や竣工から現在までの変遷を示し、それらに基づいて当該建物を歴史上に位置付けることが一般的である。本調査では、文献調査の過程において、豊橋市中央図書館に保管されていた「陸軍第十五師団兵営等敷地工事設計図」（「旧陸軍図面」）の存在を確認したことで、1907 年から建設された建物などの概要が判明し、また、愛知大学に保管されていた「払下申請図面」により、愛知大学に施設が移管された当時の状況が判明したので、文献調査の意義は大きかったと言える。また、『年次報告書—2020 年度—』には、現存建物の現状図面が収録され、遺構調査も詳細におこなわれた。調査方法として、これらの評価したうえで、あえて指摘するならば、これらを組み合わせた研究の展開が望まれる。具体的には、旧師団司令部の旧状（払下申請図面）と現状（実測図）の比較、「旧陸軍図面」の読み解き、という類の分析である。例えば、『最終報告書』に収録されている 2 枚の図面「豊橋第十五師団司令部敷地工事図」には、敷地内の標高、排水路、井戸と師団司令部庁舎の配置が描かれているが、これを見ると、この敷地が当初から平坦地で、敷地の造成作業が少ない地であったこと、平坦であるがゆえに微細な高低差を利用して排水路を設ける難しさがあったこと、がうかがえる。 陸軍が日清戦争から第一次世界大戦に至るいわゆる軍拡期に駐屯地を新設する際、「土地高燥清潔水質良好潤沢」という敷地を選定条件としていたことが知られているが、この地は、「土地高燥清潔」という点を満たしていたことが、これらの図面から読み取れる。 〈研究成果と意義〉 本研究によって、旧第十五師団の駐屯地、施設の全体像が把握できたことが一番の成果である。旧第十五師団は、大正の軍縮によって廃止されたが、その施設を利用して豊橋陸軍教導学校が新設された。現在の愛知大学第二体育館は、豊橋陸軍教導学校の大講堂として建設されたが、意外にもこれを知っている方は少なく、愛知大学に残る旧陸軍の建物はすべて旧第十五師団の建物であると思い込んでいる方々も多い。 二つ目の成果は、愛知大学のキャンパスに残る遺構のみならず、旧第十五師団傘下の各部隊が駐屯し、施設があった場所のすべてを調査対象として、遺構の確認を行ったことである。詳細は『年次報告書—2022 年度—』の 4 頁から 20 頁に記されているが、現在でも使われている排水路があることは、この地の排水が重要な問題を持っていたことを示していよう。 三つ目の成果は、文献資料の確認である。豊橋市中央図書館が保管する「旧陸軍図面」や愛知大学が保管す

様式 4（特別重点研究助成）

る「払下申請図面」の存在を再確認したことで、今後はこれらを利用した新たな研究の展開が期待できる。特に期待したいことは、当時の陸軍省が、第十五師団の駐屯地としてこの地を選んだ理由である。実態として、日露戦争時の増設四個師団の国内駐屯地決定の過程では、各地で誘致運動が展開された。豊橋でも、多くの人が、熱心な誘致運動の結果として第十五師団が当時の渥美郡高師村に誘致された、と思い込んでいる。私事ながら、高校生まで豊橋で育った私も子供の頃には、父や祖父からこの話をよく聞かされた。しかし、冷静に考えれば、当時の陸軍は「兵営地選定に関する方針」を内部で決めており、候補地とこの方針を比べた結果、駐屯地として最善、最良の地を選定しているはずであり、誘致合戦の結果ではないことは明白である。今後は、確認された文献資料を使った詳細な研究の展開により、このような俗説が打破されることを期待したい。

四つ目の成果は、「総合知」の提示である。今回の研究は、多様な専門分野の方々の協働で成立しており、昨今、にわかに注目を集めている「総合知」を提示できる体制が整ったと言える。研究開始当初に「総合知」を意識していたか否か、『最終報告書』の「事業の目的と概要」を見るとそのような記載が見られないので、不明な部分ではあるが、このような多様な分野の方々の集まりが「総合知」を生み出すのは間違いない。世の中、新型コロナウイルス感染症の拡大で、突然、「総合知」に注目が集まり、時を同じくして、2050 年カーボンニュートラルの実現に向けても「総合知」の結集、と言われている。そもそも、学問とは、究極のところ、そこを目指している場合が多いのが普通なのだが、本研究からの新たな展開を期待したい。

【吉田律人氏】

愛知大学総合郷土研究所が 2020 年度から 2022 年度に実施した愛知大学重点研究「愛知大学等における歴史的建造物の調査・研究」に関して、日本近現代史、特に軍事社会史を専門とする者の立場から評価する。この調査研究は、愛知大学豊橋キャンパスとその周辺に所在した日本陸軍の第十五師団の形成過程を多角的に検討したもので、現存する軍関係の建造物や師団設置による地域の変化、兵士の日常などを一次的な史料に基づき、実証的に明らかにしている。

1945 年 8 月の敗戦と、帝国主義を背景とした侵略行為への反省から、戦後歴史学は軍隊に関する研究を忌避してきた。しかし、研究者の世代交代や社会状況の変化、自治体史による地域史料の発掘等から軍事史研究を取り巻く環境は大きく変わり、次第に政軍関係の研究が進展したほか、戦後 50 年を迎えた 1990 年代には、軍隊と社会との関係を分析する研究、すなわち「軍事社会史」と呼べるような領域も登場するようになった。1970～80 年代に刊行が相次いだ『豊橋市史』の近代、現代編も歩兵第十八聯隊の設置に始まる豊橋と軍隊との関係を整理している。さらに 2000 年代に入ると、「軍隊と地域」研究が一つの潮流となり、分析対象の幅が拡大、2010 年代以降はその細分化も進んでおり、現在は研究成果の総覧が必要な段階に入りつつある。

そうしたなか、愛知大学総合郷土研究所の成果は、歴史学研究の基本である史料の収集と翻刻作業を重視し、防衛省防衛研究所の所蔵する陸軍側の公文書はもちろん、複数の地元新聞を用いながら、師団の設置決定から変化していく各局面の状況を立体的に描いている。特に興味深いのは、陸軍による排水路の整備で、軍隊という権力が一方的に地域社会に負担を強いるのではなく、地域側との関係維持を模索しながら活動を展開している様子が例示されている。また、騎兵第十九聯隊に所属した軍人の日記（「星野茂吉日記」）は新たに発見された史料であり、大正期の豊橋における軍隊の日常を克明に記録している。軍事社会史の深化にも大きく寄与していると評価できよう。

本研究の成果、4 冊の報告書と『豊橋と陸軍師団』は、愛知大学の有する学術的な資産を広く活用する上での基礎となるだけでなく、学生たちが地域の近現代史を学ぶ際の教材にもなるだろう。また、文化財を活用した政府の観光立国化政策を考えても、近代遺産の所在する豊橋キャンパスが文化観光拠点となり得る可能性を示唆している。一方、軍事社会史の視点からも「軍都比較論」など新しい研究へと裾野を広げていくことも可能である。本研究を基礎とした今後の事業展開、研究の拡大に期待したい。

【岩瀬彰利氏】

第十五師団は、明治 41 年に設置、大正 14 年に廃止という短命の師団である。師団衛戍地は歴史的価値がある場所であるが今まで十分な調査はなされておらず、情報は『豊橋市史』等に設置の経緯などの一部記載がある程度であり、不明な点が多かった。今回、初の総体的な調査研究がなされたので、郷土史を扱う立場から評価する。

まず、調査結果の公表として『年次報告書』2020 年度～2022 年度の 3 冊、『最終報告書』が 1 冊、『豊橋と陸軍師団』が 1 冊刊行されている。2020 年度報告は大学敷地内に残存する陸軍施設の詳細な報告で、建築図面を提示しながらの当時の建物の現況が理解しやすく有意である。2021 年度報告は、師団周辺の工事や師団設置に関わる動きを新聞記事などから丹念に集めて明らかにしている。さらに敷地内に移築された古墳の存在など、忘れられた歴史を掘り起こしている点は興味深い。2022 年度報告は、当館所蔵の地図を使った歴史 GIS データベース構築の提言、歴史的建造物に対する学生・市民の意識調査など、新たな研究手法を提示し、今後の総合調査の新たな指針を示している。『最終報告書』は、重点研究の成果のまとめと当館所蔵の第十五師団関係資料の翻刻、師団所属軍人日記の翻刻である。当館蔵の資料は手書きで解読しがたかったが、翻刻されたことにより資料の活用が見込まれる。また師団の様相については、軍人日記の翻刻によって師団で起きていたことを垣間見ることができるようになり、貴重な資料といえる。

様式 4（特別重点研究助成）

そして、『豊橋と陸軍師団』である。第十五師団の設営からはじまり、大学内の残存建物と他師団との比較、さらには「豊橋に師団があった頃」として、師団に関することを多角的に述べている。郷土史研究の視点からは、新たな知見が多数含まれており、地域の歴史が掘り起こされており、価値がある。また、全体的に簡潔で読みやすくまとめられ、資料として使いやすい構成となっている点は、図書館としても利用が見込まれて有用である。

今回、愛知大学総合郷土研究所が行った「愛知大学等における歴史的建造物の調査・研究」は、著名にもかかわらず軍事機密や敗戦後の資料処分により不明であった陸軍第十五師団について、新たな歴史的事実を発掘して基礎となる資料を公開された。郷土史を扱う立場から述べると、この調査・研究は郷土史研究の進展のみだけでなく、地域住民の郷土への関心や理解に寄与するものと考ええる。愛知大学における学内文化遺産の保存と継承に貢献する取り組みは、内外から期待されている。大学の人文科学系研究機関が郷土の調査・研究に関して積極的に取り組まれたことは、高く評価される。

外部資金獲得への取り組みについて

2022 年度の科学研究費助成事業に応募した（2021 年 9 月）。研究種目は基盤研究（B）、応募区分は「一般」、小区分は「日本史関連」、研究課題名は「日本近代における軍隊と建造物・立地環境に関する総合的研究」、4 年の計画で、研究経費の総額は 850 万円である。研究代表者は山田邦明（本学文学部教授）、研究分担者は神谷智（本学文学部教授）、廣瀬憲雄（本学文学部教授）、岡本耕平（本学文学部教授）、近藤暁夫（本学文学部准教授）、阿部聖（本学地域政策学部教授）、荒川章二（国立歴史民俗博物館名誉教授）、一ノ瀬俊也（埼玉大学大学院人文社会科学部教授）、西澤泰彦（名古屋大学大学院環境学研究科教授）、飯塚公藤（近畿大学総合社会学部准教授）の 9 名、研究協力者は泉田英雄（元豊橋技術科学大学准教授）、菅野直樹（防衛省防衛研究所戦史研究センター史料室長）、吉田律人（横浜都市発展記念館調査研究員）の 3 名である。結果は残念ながら不採択で、書面審査の総合評点も高くなく、採択を得るためには大幅な手直しが必要なので、2023 年度の科学研究費助成事業への応募は見送ることとした。